



令和7年8月27日
8・9月号 No.479
発行責任者
校長 西村 学徳
所在地 福生市熊川 623

戦後 80 年の今、戦争と平和について考える

校長 西村 学徳

昇降口前の花壇を囲む5年生のバケツ稲は、連日の厳しい暑さに負けずに青々と背を伸ばし、既に稲穂も実り始めています。いよいよ本日から2学期が始まりました。今学期も子供たちにとって充実した日々となるよう、今年度のテーマでもある「感動体験」と「安心・安全」を引き続き重視しながら、教育活動を推進していきます。



さて、この夏は「戦後 80 年・節目の年」という言葉を多く耳にし、例年以上に「戦争や平和」に関する報道が多くあったように感じました。戦後 80 年となり、戦争を体験したことがない世代が年々増えていく中、「戦争の悲惨さが風化されてしまうのではないか。」ということが危惧されています。私も戦争を知らない世代の一人です。戦争や平和について当事者意識をもって考えなければならぬと日々思いつつも、どこか他人事になってしまいそうな自分を戒めるべく、この夏は、戦争や平和に関することに触れる機会を意識的に増やすようにしました。その中で、特に印象に残った出来事が2つあります。



1つは、8月17日に市民会館で開催された「戦争関連資料の展示会」と「平和のつどい」に参加したことです。展示会では、市内で見付かった焼夷弾の残骸や出征時の旗、軍服など、戦禍を物語る生々しい展示品が並んでいました。そして、その1つ1つを市の担当職員の方が分かりやすく説明をしてくださいました。数々の展示品やお話からは、この地でも恐ろしい戦争が確かに行われ、辛い思いをされた方々が多くいらしたことが分かりました。また、「平和のつどい」では、戦争体験者の方による講演会があり、戦争によって変わっていった日常生活や平和を強く願う思いなどを伺うことができました。「戦争は、戦争後も人々を苦しめ続けた。」というお話には、胸が締め付けられる思いをしました。そのような中、最後の意見発表会で、市内の高校生が述べた「平和な未来を築いていく責任が私たちにはあります。」という力強い決意の言葉には、大きな感銘を受けました。

もう1つは、我が家のことになりますが、約7年ぶりにテレビで放送されたあるアニメの戦争映画を高校生の息子と一緒に観たことです。この映画を私は6年生の時に初めて観て、戦争がもたらす悲劇に衝撃を受けました。父親として、これまで戦争や平和について息子と話し合うことをしてこなかった反省の思いもあり、息子を誘って一緒に観ることにしました。思春期に入っからは、私とぶつかることが多く、あまり口を利かなくなった息子がどんな反応をするのかとても気になりましたが、表情を変えずにじっと画面を見続け、見終わった後は多くを語らずに部屋に戻っていきました。その様子からは、どんな思いをもったかは分かりませんでした。その2日後に息子が「お父さん、今日、本を買った。戦争についての本。」とボソッと私に話し掛けてきました。その言葉を聞いた時、今回のことは、息子にとって戦争や平和について知りたい・考えたいと思うきっかけになったのかもしれないと思い、思い切って誘ってよかったと思いました。

4月の「広報ふっさ」に、「戦争を経験した世代の高齢化により、人々から戦争の記憶が薄れゆく中、平和の大切さを後世に伝えていくことは、私たちの使命です。」との言葉があります。私たち大人はこの「使命」という言葉を心に刻み、大人の責任を果たしていかなければなりません。

学校でも2学期には、戦争や平和に関連する学習、人権尊重に関する学習が各教科や道徳などで行われます。これらの学習を大切に、子供たちが戦争や平和について主体的に考えていけるように、その種をまいていくこと（＝意図的な機会の設定）を大切にしていきたいと思います。